

平成二十一年九月

西宮神社

# 海上渡御祭再興十周年記念誌

西宮神社  
西宮まつり協議会



西宮神社

海上渡御祭再興十周年記念誌

## 御挨拶

西宮神社 宮司 吉井良昭



このたび海上渡御祭再興十周年を記念し、予てより念願の神戸・和田岬への海上渡御を賑々しく斎行申上げましたことは、何よりもご出現された滄海への「産宮参り」を果たされましたえびす大神様が殊の外お慶びのことと拝察致しております。また装束を召されて渡御行列に奉仕された氏子の皆様、和田岬まで船やバスで供奉された崇敬者、ご協賛の方々には心より厚く御礼を申し上げます。顧みますと、阪神淡路大震災の激震により大きな被害を受けられた方々からの「西宮の街が一つになるような祭りを復興の証として行いましょう」ということばから始まり、震災後五年が経過した平成十二年に第一回の海上渡御が、社前に広がる茅渚の海・西宮沖から御前浜にかけて繰り広げられました。そして今年、再興十回を記念して同祭の歴史的且つ信仰的本旨であり、また一同の念願であったえびす大神様の和田岬渡御が厳肅な中盛大に執り行なわれました。

この海上渡御祭は、氏子四地区の代表により構成された西宮まつり協議会が主催する「西宮まつり」の神事として執り行なわれております。限られた文献から再興に尽力されました初代中島会長、同じく井田実行委員長は既に故人となりましたが、お二人のお力なくしては今年の盛大な渡御には至らなかつたと、そのご功績に改めて感謝の意を表するところでございます。また二代藤村会長は温厚な人徳で皆を纏められ、最高齢の理事相談役として現在もご奉仕頂いています。三代油野会長は人望篤く、海に精通しておられることから、何の不安もなく海路を一路和田岬へ進むことができました。このことは奉仕者一同の気持ちでございます。

和田岬では縁深い和田神社奥田宮司様、三石神社小林宮司様には格別のご配慮を賜りますと共に、御旅所祭にご参列いただきましたこと心より御礼を申し上げます。また鎌倉の代に一遍上人と西宮神主が対面した真光寺の皆様にも一遍上人墓所への参拝の便宜をお図りいただき感謝申し上げます。

このように大勢の皆様のお蔭により、実に戦国の乱世に中断して以来四百年余りの時を経て、えびす大神様を氏子崇敬者供奉のもと「産宮参り」を斎行できましたことに御礼を申し上げますと共に、今後とも広大無辺なるご神徳をいただき、益々ご繁栄されますよう祈念しご挨拶と致します。

## 御挨拶

西宮まつり協議会会長 油野 博



この度、海上渡御祭再興十周年記念誌の発行に当たり、海上渡御の復興について私の思い出すままに申し述べ、皆様のご参考になれば幸いと存じます。

海上渡御祭、船渡御の歴史は平安時代の末期の頃に始まり、その間幾多の変転を経て現在に至っています。昭和二十九年から市内巡行の陸渡御が復活し、浜脇、用海、安井、香櫛園を壱年ごとに当番地区に定め、夫々の町内の氏子の皆さんが、巡行する道路の両側に綱を張り、御幣を結つけてお迎えの準備をして、御輿のお通りを見送りましたものでした。平成七年一月十七日に発生した阪神大震災でその後一時中断されましたが、神社を始め氏子、町内会や西宮中央商店街が中心となり「西宮まつり協議会」が結成され、協議の結果、今後二十一日の宵宮から二十二日の例祭、二十三日の渡御祭の三日間を「西宮まつり」と名付けて西宮市の活性化に繋がるような催しとして行うこととなりました。船渡御の航路は御前浜の周辺とし、新西宮ヨットハーバー、関西ヨットクラブのご協力に加え、氏子崇敬者有志の方々からのご寄付などにより、船渡御実現を見ることになったのであります。

平成十二年の船渡御再興から十年目となる今年、船渡御をさらに古儀に近く復現、和岬までの海上渡御と西宮までの陸上還御と云う四百年前の姿に戻して行きたいとの希望が西宮神社側から西宮まつり協議会理事会に提案されました。協議の結果、これを快諾し、さらに同実行委員会で度々検討を重ね、今日に至った次第であります。

最後になりましたが、古来西宮えびすの大神様は、海の守り神として、又商業繁栄の神として私達をお守りいただいています。今後とも、このご恩に報いるべく、努力してまいりたいと思っております。

## 御祝辞

和田神社 宮司 奥田 雅人



「産宮参り」再興十年を心よりお祝い申し上げます。

和田神社は明治三十四年に国策により現在地に遷って参りました。かつては現在地より東南約八百メートルの海に面した地に鎮座していました。今は三菱重工神戸造船所となっています。当社が鎮座していた頃は、この辺りを「蛭子の森」と称し蛭子神が祀られていた処で、西宮神社の産宮参りの折りには休憩所が設けられていたとのことでした。

和田神社は一六六二年に尼崎城主の青山大膳亮幸利公の発願により、当時和岬に祀られていた全ての神様を和田神社に集め祀りました。その時に蛭子神も境内の末社に祀られましたが、一七四四年の社殿改築の折りには相殿に祀られる事となりました。その蛭子神が当時の蛭子の森に祀られていた神様で、現在も和田神社に祀られています。今後も「産宮参り」が盛大に斎行されますことをお祈り申し上げます。

## 御祝辞

三石神社 宮司 小林 友博



第十回目を迎えられた西宮神社海上渡御和岬産宮参りが盛大に斎行されますことを、心よりお慶び申し上げますと共に和岬海上渡御の約四百年ぶりの復活立案とその実施にあたっては、氏子各位の並々ならぬご理解とご協力の賜物とご拝察いたし、敬意を表する次第です。

さて、当社への産宮参りは、江戸時代に編纂された『西宮大神本紀・西宮神主日記』に「和岬に海上渡御神幸の際、三基の神輿を奉安した三ツ石や被殿のこと」が記され、その係わりの深さを知ることが出来ます。

産宮参り復活第一回目の十年前は、権宮司様をはじめ九名の参拝でありました。この度は、十回目にあたり心よりお慶び申し上げますと共に、貴神社の今後益々のご隆盛と氏子の皆様のご繁栄を心からご祈念申し上げます。

《目次》

御挨拶

西宮神社宮司 吉井良昭 一頁

西宮まつり協議会会長 油野 博 二頁

御祝いの辞

和田神社宮司 奥田雅人 三頁  
三石神社宮司 小林友博

概説

海上渡御祭等の略年表 六頁

海上渡御祭の歴史 七頁

陸渡御の復興 八頁

海上渡御祭の再興(一) 九頁

海上渡御祭の再興(二)

《参考資料》 「山槐記」「一遍上人絵伝」「資忠王記」 十頁

「西宮殿年中御神事」「西宮神主覚書」「西宮大神本紀」

海上渡御図 十三頁

各説

平成十二年 十四頁

平成十三年 十六頁

平成十四年 十七頁

平成十五年 十八頁

平成十六年 十九頁

平成十七年 二〇頁

平成十八年 二二頁

平成十九年 二二頁

平成二十年 二四頁

平成二十一年

海上渡御祭再興十周年年表

二八頁

平成二十一年神幸の所役、奉仕者氏名等

三〇頁

後記



「一遍上人絵伝」より

西宮神社 海上渡御祭等の略年表

元号年	(西暦)	事項
(平安時代)		
大治三年	1128	広田神社にて歌合せの会があり、えびす神の歌が詠まれている
治承四年	1180	中山忠親「山槐記」8月22日の条に、海上渡御祭の様子が記されている
(鎌倉時代)		
正応二年	1289	「一遍上人絵伝」に8月22日に神幸が行われていた事が記されている
(室町時代)		
応永二十年	1413	白川神祇伯「資忠王記」に「伏見より西宮に下向、今日兵庫御幸なり」の記載がある
(安土桃山時代)		
元龜二年	1571	「廣田社年中御神事」に「八月廿二日大輪田御神事」とある 「西宮殿年中御神事」にも「八月廿二日大輪田御神幸」とある
天正六年	1578	荒木村重の乱にて社殿焼失
(江戸時代)		
慶長十四年	1609	このころ社殿再建、豊臣秀頼の寄進により表大門ができる
寛永十一年	1634	「信長公より社領之無きに付き、日本第一のまつり事、すたり申候」と幕府に神幸(産宮参り)の復活を嘆願する覚書が残っている
承応二年	1653	社殿焼失
寛文三年	1663	四代將軍家綱の寄進により社殿再建される
(明治以降)		
昭和二十年	1945	大東亜戦争末期、空襲により国宝の本殿他社殿等焼失(表大門、大練塀は残る)
昭和二十九年	1954	社殿復興は未だ成らずも、渡御祭を再興(陸渡御)
昭和三十六年	1961	三連春日造りの本殿始め社殿復興成る
平成七年	1995	阪神淡路大震災により、社殿等甚大な被害を受ける
平成十二年	2000	震災復興もほぼ相成り、「西宮まつり協議会」設立し、400年振りに海上渡御祭を再興す
平成二十一年	2009	海上渡御祭再興十周年を記念し、神戸・和田岬への神幸を行い、平安、鎌倉時代から続いていた「日本第一のまつり事」を復興す



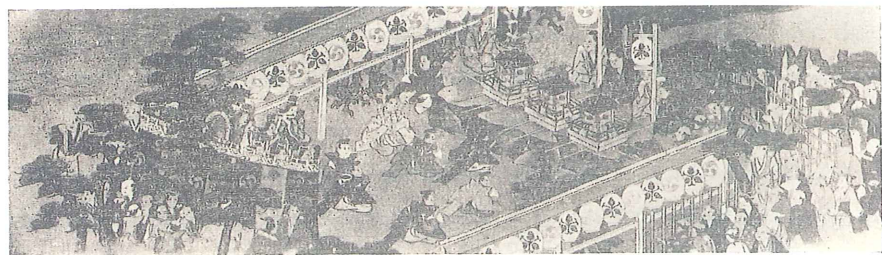
海上渡御の景観

西宮大神社本紀に載せられた西宮神社の幸神図

海上渡御祭の歴史

西宮神社の神輿が神戸の和田岬へ神幸していたことは、平安時代末期、治承四年(一一八〇)の中山忠親の日記「山槐記」八月二十二日の条に記されているのが初出です。また、国宝「一遍上人絵伝」(正応二年・一一八九)からも窺い知ることが出来ます。この御神幸は、御祭神えびす様の御神像を鳴尾の漁師が和田岬沖で拾い上げ、この西宮の地にお連れ申し上げたという御鎮座伝説に因むものでありますが、平清盛が福原に都を遷し、大輪田の泊を改築するにあたり、西宮戎の御神助を願う為に行われたという説もあります。

その壮麗な御神幸の様子は、往路は幾艘もの船を旗や幕で飾り、海上所狭しと連ね海上渡御を行い、和田岬の御旅所では時節の花を飾り、舞などを奉納した後、帰路は馬を連ね陸路六里をその日の内に帰っていたようです。これを産宮参り(うぶみやまいり)と言い慣わしていたことが、寛永十一年四月に西宮神主吉井良重らが幕府に提出した書状の覚書として残っています。しかし同時にこの覚書には、「信長公より社領無之に付、日本第一のまつり事、捨り申候云々。」とあり、御神幸が廃絶してしまったことが書かれており、往時の御神幸の華やかな様子は、絵巻物「西宮大神本紀」からうかがい知ることが出来るのみとなりました。



和田岬御旅所の景観

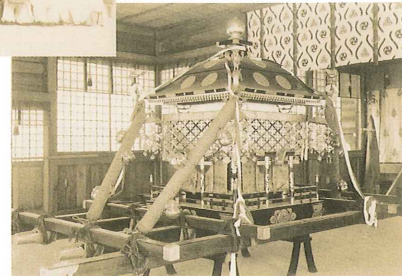
西宮大神社本紀に載せられた西宮神社の幸神図

## 陸渡御の復興

先に述べた和田岬への御神幸の途絶後、明治に入ると改暦に伴い、ひと月遅れの九月二十二日に御例祭を斎行していましたが、昭和二十九年からは市内巡行の陸渡御が復活しました。神職は馬車に乗ったり、馬に揺られたりと悠長な道中だったようです。御社殿の戦災からの復興、高度経済成長期などを経て四十年間この様な形が続きましたが、しかしこれも阪神大震災で中断してしまいました。



昭和 29 年 仮本殿



御輿



昭和 30 年



## 海上渡御祭の再興 (一)

平成十一年三月に当社の震災復興も完了したのを機に、復興の象徴として約四百年間途絶していた海上渡御を復興しようとする機運が高まり、氏子町内会や西宮中央商店街が中心となって「西宮まつり協議会」が結成されました。翌平成十二年、協議の結果、宵宮の九月二十一日から二十二日の例祭、二十三日の渡御祭までの三日間行われる神賑行事も含めて「西宮まつり」と名付けて、西宮市の活性化に繋がるような催しとして行くこととなりました。

船渡御の航路は、新しく造成された西宮浜の周辺とし、新西宮ヨットハーバー、関西ヨットクラブのご協力に加え、氏子崇敬者有志の方々からのご寄付などにより、船渡御の復興実現の運びとなったのであります。

## 海上渡御祭の再興 (二)

平成十二年の海上渡御祭の再興から十年目となる今年平成二十一年、船渡御をさらに古儀に近く復元、和田岬の御旅所まで御祭神をお連れ申す海上渡御と、西宮までの陸上還御と云う四百年前の姿に戻して行きたいとの秘かなる望を社内で温め、西宮まつり協議会理事会に諮ったところ快諾を得られ、さらに西宮まつり協議会実行委員会において実施要領が検討され今日を迎えました。

今後、この形を毎年続けるのか、隔年又は十年毎の式年の行事とするかは今後の検討課題でありませんが、一度でも行い得たという事は、向後につながるものと思われれます。



「山槐記」(中山忠親卿日記、鎌倉時代・一一八〇年)

治承四年八月廿二日壬寅、雨下、暁更参福原、一昨日自新院有召也、於富森邊天曙、於今津留船差饌、申終剋着大物差饌、日没程乘輿、於武庫河邊麟暗、水深雜人步渡及胸、昇居輿於渡船渡河、戌剋着西宮宿所、今日神輿令出輪田御崎給、亥剋還御本宮、在人等云、オレソキ於輪田有御禊也云々、御禊歟、(後略)

国宝「一通上人繪伝」(鎌倉時代・正応二年八月二日・一二八九年)

(前略) 又在地人に中務入道と申ものまいりて、今日は西宮の御祭にて候、在地のものども御行に参事にて候が、今日御臨終にて候は、御行にははづれ候べし、いかゞ仕候べきと申ければ、聖さらば今日はのべこそせめと仰らる、又日中已後しばしまどろみ給たりしが、をどろきて、たゞいま西宮の大明神の最後の結縁せむとおはしまして、をどろかさせ給つるとかたり給ほどに、西宮の神主まいりて申すよう、去年西宮に御参詣の時より知識とたのみまいらせて候が、御臨終のよしうけ給候てをがみたてまつり、十念つけまいらせむと存候て、神明の最後の御共と存じて候つるが、わざと御行よりさきにまいりて候なりと申を聖き、給て、なげしの上へと召請し給に、神主かしこまりて侍を、存ずる旨あり、うへ、のぼり給へ、しからずば十念をばさづけ申まじきぞとおほせられしかば、うへ、のぼりて十念つけたまつりき、かずとりをさづけ給しかば、給はりていそぎかへりぬ、ゆへある事もや侍りけん、人に十念さづけ終事これ最後なり、されば縁謝即滅のはしめ利生方便のをはりて神も名残を惜み給ひけるにこそ云々、

白川神祇伯「資忠王記」(室町時代・一四一三年)

応永二十年八月二十二日

未明伏見より西宮に下向、申終下着了、今日兵庫御幸なり、還幸以前に予落着了、西終許に還幸云々、

「西宮殿年中御神事」(吉井家文書、安土桃山時代・一五七一年)

(前略)

八月

朔日 旬御神事 くさい地下中勤之

新生会御神事吉日を以

十一日 旬御神事 くさい地下中勤之

十九日 御放生会

廿一日 旬御神事 同くさい勤之

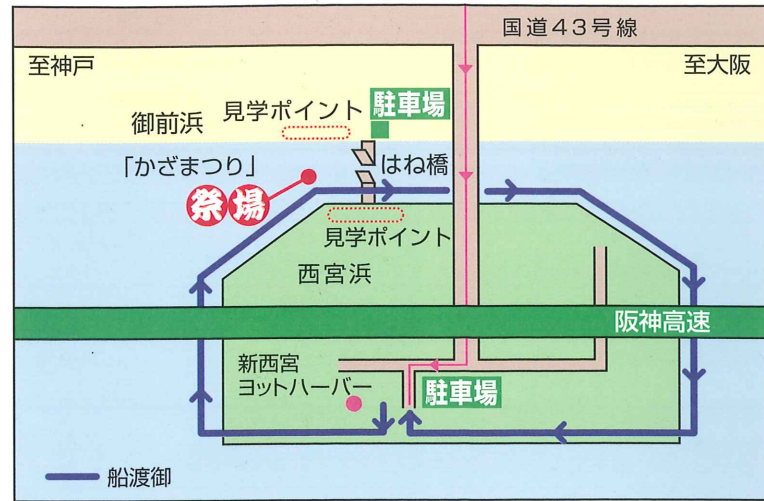
廿二日 大輪田御神幸

廿三日 名次御神事 西崎丁居籠

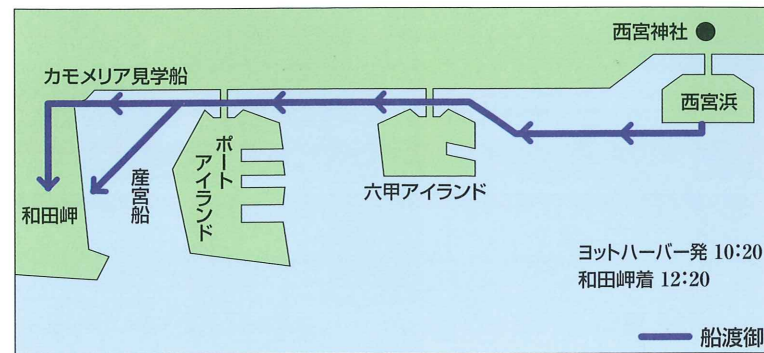
(後略)



第1回平成12年から、  
第9回平成20年までの海上渡御図



第10回平成21年の海上渡御図



「西宮神主吉井良重 平田兼家らが幕府に提出したる覚書」(江戸時代、一六三四年)

(前略) 右両社(註・廣田、西宮)の社領、昔は二万石余御座候此の上に頼朝公御代に御立願たてられ成就仕りたる由にて淡路廣田莊御加増として、御附被成候。然れども三好の御代には五千石余社領相残り神事を勤め申候、昔は一年に七十五度の神事有之、中に八月二十一日の大神事と申すは西宮より御輿を出し、兵庫和田ノ崎まで道六里参り其日に帰り給ふを産宮参りと申候。神人氏子軍陣の出立にて供仕りたる由に候へども信長公より社領無之に付、日本第一のまつり事捨り申候云々。

「西宮大神本紀」(江戸時代)

伝へて曰、往古の御祭りは兵庫の海原を遙かに神輿を漕出し奉る。その御船飾りきらきらしく、上の御使は神輿に扈從し給ひ、又近き国々の守よりも従ふ人々を出し給ひて、千船百船を漕ぎなべて、海の上も所せまきばかり、錦の纜、綾の帷幕は、た、春秋の花紅葉を一時に波のへに浮べたる如く、暫く御旅と申す仮宮に遷し奉りては、時の花をかざり、鼓笛を鳴らして俳優舞をしつ、いさめ奉りけるなり、また還り入らせ給ふは、陸より神輿をかきつらね、道すがら神いさめの拍子とりて、はるけき長手を從駕のつらなりたる、雲霞なせりと。いま和田の御崎より兵庫の津の間に、御茶屋と称へて遠近に残れる跡いちじるし。さて南宮の御氏子の中、六之馬、八馬、善茂馬などいへる家の名の侍るは、その御祭を見る者、例として「騎たりや善茂馬、鞘の銭も払はで」とうたひける由の残れるにて、こは氏子の中より馬にのりて御供を申しける齋どもなり。さて昔世の乱に、神税も空しく奪はれ御社も破壊、御祭も衰へつ、あれど、今更に昔の御模をもて、神祭おこたり奉ることはあらず云々(後略)

平成十二年九月二十三日

約四百年振りに海上波御祭を再興し、西宮港にて御旅所祭を斎行後、港内を巡幸

先代・吉井良隆宮司 初代中島正規会長  
大手前大学学生参加あり



はね橋を通る



御座船



童男 八乙女



供奉船



御に供奉する吉井良隆宮司



八乙女出発



御を奉じて



御旅所祭



井田実行委員長、中島会長、猿田彦と続く





陸渡御の出発、第二代藤村会長以下



アーケードの中央商店街



御座船



和田神社参拝



三石神社参拝

平成十四年 「産宮参り船」が復活し、一艘が和田岬へ行き、和田神社・三石神社へ参拝のみ行う。  
第二代藤村会長

平成十三年

阪神大震災後途絶の陸渡御も復興する  
かざまつり（風祭）も復興

夙川学院短大学生も今年から加わる



陸渡御



風祭の復興



夙川学院短大も参加



大手前大学号



御を奉じて出発



新宮司の祝詞



渡御委員長



風祭



港内神幸の御座船

平成十六年 吉井良昭新宮司奉仕



御霊を御輿に



宮司祝詞奏上



樂を奏す



第三代油野会長以下



御旅所祭祝詞

平成十五年 第三代油野会長



初参加布団御輿



童男 八乙女



鳴尾惣太夫も初参加

平成十八年 御旅所祭を氏子担当地区で行うこととなり、用海地区（日本盛構内）にて行う  
布団御輿が初参加 鳴尾惣太夫参加



用海地区での御旅所祭



大阪天満宮の人形船



西宮港内を巡行する船団



御、赤門を出る



女性の御輿も



今年から童女神楽を始める



供奉船



童女・八乙女



大型観光船

平成十七年 童女神楽を始める。今年からは脇地区の童女等が奉仕



香榎園浜に入る女性御輿



香榎園地区を進む



氏子奉幣使



童女神楽



風祭のお祓い



神幸する御座船

平成二十年 御旅所祭(香榎園地区)  
剣鋒復活 地域船の新設



奉仕者・参列者



浜脇地区の童女



鳴尾惣太夫も列に加わり



淡路の人形操りの参加



一列になって海上渡御

平成十九年 御旅所祭(安井地区)  
風祭に淡路人形操りが参加



女性御輿



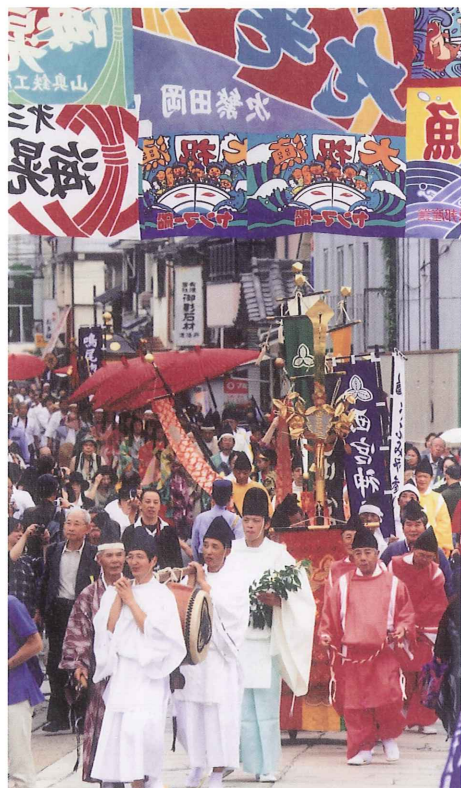
和田岬御旅所まで列を整え



巫女八乙女等



布団御輿



町並みをぬけ和田神社へ (朝日新聞社提)



和田岬の町並みを御輿が神幸



若戎だんじりも鳥居をくぐり

和田岬まで御輿を船に乗せ、御祭神をお連れし、御旅所祭を齎行。西宮までは陸上還御。



午前九時半出立



発輿祭



今年の福男が切麻でお祓い



御座船 西宮港を出航



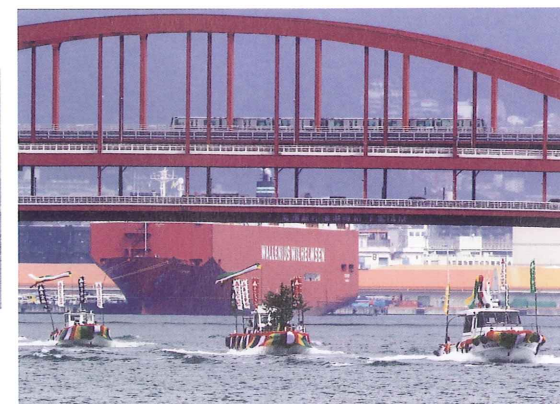
風祭を終え一路和田岬へ



御前浜沖 風祭



兵庫の港



神戸港沖神幸 (朝日新聞社提供)

平成二十一年 海上渡御祭再興十周年を記念し、海上渡御を古儀に近い形で再興。



三石神社参拝



和田神社参拝



御参列の足下



一遍上人御廟



総ての行程を終え夕刻の還御祭



奉仕者・参列者五百余名



安井地区童女神楽



御旅所祭



浦安の舞



和田神社奥田宮司



氏子奉幣使



渡御委員長



子供布団御輿



参拝の前導猿田彦



三石神社小林宮司



和田宮のだんじりと練り合わせ



えびす舞の奉納

平成二十一年海上渡御祭、再興十年一度も雨にあわず、今年も無事に斎行出来ました。  
(いぬづか写真室、朝日新聞社、田野直美様から写真提供)



海上渡御祭再興十周年 年表

	宮 司	西宮まつり協議会			氏子担当地区		奉仕員数	渡御船数	特記事項・その他
		(会長)	(実行委員長)	(渡御委員長)	(御旅所祭)	(童女神楽)			
平成12年	吉井 良隆	中島 正規	井田 鞆	井田 鞆	(西宮港にて斎行)		行 列 63 御輿他 93 合 計 153 人	6 艘	西宮まつり協議会が発足し、約四百年振りに海上渡御再興、西宮港にて御旅所祭斎行後、港内を巡幸する 大手前大学学生参加
平成13年	吉井 良隆	中島 正規	油野 博	中島 正規	(西宮港にて斎行)		行 列 60 御輿他 129 合 計 189 人	6 艘	阪神大震災後途絶の陸渡御も復興する。かざまつり(風祭)も復興 夙川学院短大も今年から加わる
平成14年	吉井 良隆	藤村 浄	油野 博	藤村 浄	(西宮港にて斎行)		行 列 67 御輿他 114 合 計 181 人	6 艘 (本隊) 2 艘 (産宮参)	「産宮参り船」を復活し、和田神社・三石神社へ参拝する
平成15年	吉井 良隆	油野 博	清水 清三郎	油野 博	(西宮港にて斎行)		行 列 73 御輿他 95 合 計 168 人	6 艘 (本隊) 2 艘 (産宮参)	
平成16年	吉井 良昭	油野 博	清水 清三郎	菊地 一郎	(西宮港にて斎行)		行 列 74 御輿他 91 合 計 165 人	6 艘 (本隊) 2 艘 (産宮参)	
平成17年	吉井 良昭	油野 博	清水 清三郎	松下 治正	(西宮港にて斎行)	浜脇地区	行 列 89 御輿他 99 合 計 188 人	6 艘 (本隊) 2 艘 (産宮参)	童女神楽を始める
平成18年	吉井 良昭	油野 博	清水 清三郎	菊地 一郎	用海地区 (日本盛本社)	用海地区	行 列 84 御輿他 125 合 計 209 人	6 艘 (本隊) 2 艘 (産宮参)	氏子地区御旅所祭の再興 鳴尾惣太夫の参加 布団御輿参加 浜脇中学校の参加
平成19年	吉井 良昭	油野 博	清水 清三郎	菊地 一郎	安井地区 (松秀幼稚園)	浜脇地区	行 列 89 御輿他 152 合 計 241 人	6 艘 (本隊) 2 艘 (産宮参)	風祭に淡路人形操り参加
平成20年	吉井 良昭	油野 博	清水 清三郎	菊地 一郎	香櫛園地区 (香櫛園浜)	香櫛園地区	行 列 136 御輿他 156 合 計 292 人	8 艘 (本隊) 2 艘 (産宮参)	剣鉾復活 童男八乙女に介添を付ける 地域船の新設
平成21年	吉井 良昭	油野 博	清水 清三郎	清水 勝巳	(和田岬にて斎行)	安井地区	行 列 125 御輿他 158 合 計 283 人	4 艘 (祭典船) 2 艘 (見学船)	海上渡御を古儀に近く再興、和田岬まで御輿を船に乗せ、御祭神をお連れし、御旅所祭を斎行 西宮までは陸上還御する

平成二十一年 西宮まつり協議会 役員

会 長 油野 博	事務局長 清水 勝巳	理 事 山口 滋
副会長 清水清三郎	理 事 吉田 清司	理 事 鈴木 信幸
相談役 藤村 浄	理 事 鍋谷 憲幸	理 事 岡山 勝義

理 事 小林 利裕	理 事 西本 和男	会計監事 大西忠四郎
理 事 菊地 一郎	理 事 小山 博	会計監事 津金 武敏
理 事 前田 實	理 事 吉井 良英	



「西宮神社 海上渡御祭再興十周年記念誌」

刊行

兵庫県西宮市家町一十七

西宮神社

宮司 吉井良昭

西宮まつり協議会

会長 油野博

平成二十一年九月三十日

刊行日  
印刷

兵田印刷工業株式会社

## 後記

平成十二年、海上渡御祭が再興されたことは、当時も大きく報道された。阪神淡路大震災からの復興が進む中で、災いを転じて福となすの気運も手伝い、全国各地で色々な祭の復興もなされた。

当社では、西宮まつり協議会という地域振興の役割を持つ集まりが発足し、地元の人々の心の中に生き続けていた渡御祭が復古されたのである。一度死絶えたものでなく、心の中に生き続けたものの復古は、これからも生命あるものとして続くであろう。

十年を一区切りとして、後のためにこの記念誌を発売するものである。

(編集子)

## 平成二十一年 神幸の所役、奉仕者氏名等

所役名	装束	奉仕者氏名
御輿供奉者	直垂	桶本 洋祐 米澤 正宣
神輿指揮(二基)	袴	長岡 克彦
布団御輿奉拜者	法被、江戸又	岩崎 正夫 他 約50名
子供布団御輿奉拜者	法被、江戸又	約40名
女子御輿奉拜者	法被、江戸又	夙川女子短大生 国際交流協会留学生 他 約15名
御先太鼓 舁人	白丁	大野 剛
打人	直垂	浅春 政孝
舁人	白丁	楓 佳浩
先被	常装袴衣	櫻田文 小西 保流
劍 鉾	退紅	香野 義賢 前田 政雄 山口 滋 平井 秀典
劍 鉾	退紅	森垣 芳彦 大山 博隆
白 杖	素襖	西木 和男 都倉 克己
社名旗	白丁	弘中 次雄
西宮神社旗	白丁	平田 照佳
うぶみや参り旗	白丁	松井 栄二
渡御委員長	袴	清水 勝巳
氏子奉幣者	直垂	清水清三郎
猿田彦	袴衣	吉田 清司
五色旗 青	黄衣	吉田 穂
〃 黄	黄衣	末木 潔
〃 赤	黄衣	田中 勝起
〃 白	黄衣	濱野 信秋
〃 黒	黄衣	久原健次郎
錦旗	黄衣	山根 薫 八川 一雄
祭員	常装袴衣	櫻田文 浄見 條
伶人	直垂	森崎 健司 大村二三男 高塚 理孝
巫女	千早	濱木 有春 田中 裕子
童女	千早	吉井 幸佳 杉村 風花
童女	千早	木山 珠希 三宅 舞
童女	千早	細井美七海 菱木 濤
童女	千早	川藤萌々菜 菱木 優
淡路人形操り		木須 寿宗 松本 篤 乙井 恵理 野口 真依 郷 奈都美 村中 真紀 姥谷 知美
金 幣	布衣	上住 政一
銀 幣	布衣	岡本啓八郎
御 桶	直垂	川上 順司 山根 昭美
御 棒	直垂	酒井 利彦 岡本 圭司
御弓矢	直垂	小山 尚志 当倉 博人
御太刀	直垂	正岡 泉 池田健三郎
祭員	常装袴衣	櫻田文 龜山 剛彦
八乙女	小 袷	池田絵里子 蔭山真理子
八乙女供奉	黄衣	荒川 裕紀 福島 康夫
八乙女	小 袷	新田 芽衣 坂本 尚美
八乙女供奉	黄衣	津戸 武志 阪本 貴良
八乙女	小 袷	奥田 梨奈 上林 有里
八乙女供奉	黄衣	鈴木 信幸 佐野 孝
八乙女	小 袷	松本 尚子 坂戸あゆみ
八乙女供奉	黄衣	伊藤 健司 竹重 満
紫 簪	直垂	当倉 博人 大塚 勝巳
隨身	衣冠	津金 武敏 多司馬清利
祭員	正装衣冠	細倉 吉井 良英
十日えびす福男	袴	外山 哲
十日えびす福男	袴	大迫純司郎
鳴尾惣大夫横	白丁	中本 茂
鳴尾惣大夫	袴	中野玄之廣
鳴尾供奉者	直垂	澤田 賢吾 小村 貴生
御輿供奉者	直垂	内田 一男 小山 博 式地 喜志
御輿供奉者	直垂	吉岡 和男 奥中 忠一 松下 治正
神輿指揮	袴	泉 喜久雄
[御] 御輿奉拜者	法被、江戸又	御輿奉拜諸社講員 他 約60名
御輿供奉者	直垂	小部 豊 稲田 忠男 上田 熬 長村 修一
御輿供奉者	直垂	川口 半吾 吉田 勇一 前田 實 鈴木 健蔵
密司	正装衣冠	宮司 吉井 良昭
密司供奉	黄衣	軸屋 鏡二
童男	水干	小山 颯斗
童男供奉	黄衣	前田政次郎
管 簪	直垂	小谷 悟 中西 猛之
唐 櫃	白丁	石丸 次郎
唐 櫃	白丁	浦辺 幸博
各地区横	白丁	今井 栄子
地区代表	袴	鍋谷 憲幸 雲林院喜一郎 川野 謙一
地区代表	袴	竹花 宏 森 信孝 木村嘉三郎 村岡 和繁
各地区横	白丁	岡田 直久 田岡 春夫
地区代表	袴	古川 宙太 昌武 幹郎 中西 浩治
地区代表	袴	藤澤 茂男 菊池 一郎 油野 博

以上神幸奉仕者283名及び地車奉仕50名、参列者210名、総計543名